

八代集抄

拾遺契別物名

十六

特別

イ 4

3163

104(16)

9 140 1 2 3 4 5 6 7 8 9 150 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4



山王寺也 眞彌寺也
之池をこゝ山階と
いふ地を和州と云ふ
藤原不比等は建武
秀令經 秀令長
をといふ。經と四
子令云々金泥は
より早き供養に
なり。其の寺は
龍の中を云々なり
は云々。地を龍

時山きまちは金沢美奈經四十卷を
 写し供書にせりて此書較舊は
別漢の書
 くもせてすむよふことありたり
 するわれ志といふあましの再所
 てなかりやまかぬなり
 山きま乃やまれ雲ね松をうへ
 らぬいあひいらふわつらる
 もとより一冊のし
 仲安法師 ガシ 真福寺僧在
 えん尺書
 あめのきこひのうめ

卷之

山寺よりこのてらへ
大木山蹟に常盤^{トキ}坐^{カサ}
盤はけねの常夜^{トキ}夜^{カサ}
あんををるを云
て思ををるを云
なるやをるを云
なるやをるを云
なるやをるを云
なるやをるを云
なるやをるを云
なるやをるを云
なるやをるを云
なるやをるを云

承平四年、中宮乃薨。侍る。
屏風より
^{イナ}後宮内侍
さうぬねと行かれすなりよを
いづしきともやのこも人
おふりては乃杖はらひく
ゆるきは
大田原親基
一うちあまにやりてえられ
はいむかしからかたよりの
とい呼ぶ史記ありけり^{天ヒ}
ふれいでてゐたりていふこと無福ものぞ
おもひけりそのときな言へんやうなり

一うまをちんぎとぬ
 君の龍はつるがしらに
 つきまつたお堀あり
 きふりよなほゆきとて
 はばきの龍いふ名の
 審とあるはうけ
 きともうねれども
 あれいはとて
 寝るとも
 毒神の午方の赤と
 上席じろカスレく
 幾りのものを經
 るんとて
 わやとにさくる橋の
 花をみよむらじ
 こころは枯木の流
 るまづとて

榮 四

Handwritten signature: *John C. Smith*

よの

又しほきせぬとて
 年七十五才古来稀
 あるに壽命命あらず
 久しき世を延びて
 杖をせられぬのみ
 もつとぬ世をもう
 のふつとぬ世をもう
 うねやまをうねやま
 漢法に大段大段
 従一位をうねに
 不長き一は後
 命をうねに
 位に
 位に
 位に

内裏の子日婦とれえ
 所せとよやわきあふ
 され子見ふはふとふ
 ていふとわの娘とて
 下らふはわと下藤
 廉義とて定客の時や

康保三年丙寅三月廿二日

くまの殿上のちのこもわあはふ

まろき
藤原のすけ
信賢之弟
是祖と云ふ

あゝきこふをふれぬひふ

中々子ひへりぬ

清恬公廉義公父

小野宮太政大臣家子 子月三傳

くまのしんがひ

三系太政大臣廣文公

けりしきもなほひの
 けりしきも子目の松の
 まきやうしうしうへ
 とは松公乃々年屋
 あんをひくしと

ねをのしとせむとふ

家集六川乃引
乃松と松をの舟と

まづのふりてあそ
ぶふりふりのふり

世に於て

みづのちの

六月後ハ疾病消除
惡鬼降伏等の功德
あれども有明の
茅場とてゆゑ

ゆすきぬのひ乃松のこめうふ
きふのちの世をひんとうおふ

延喜御時御屏風

了

松をのふさきやどぢりや世をいふ

あふといふとふりあふり

題
壽人

千八百九十九年

ちをいのちのうとあり

景平四年中宮乃始一傳乃屏

[illegible]

天曆御時九月十六日
 御製
 母計子中納言
 庶明女

わたりぬきけしうあしぬりま
 喜種 源長 獸男 佐和 孫太 和 孫三 子
 源よりぬきけしうあしぬりま
 すめりぬきけしうあしぬりま
 もろもにぬきけしうあしぬりま
 らひとぬきけしうあしぬりま
 おねぬきけしうあしぬりま
 ぬきけしうあしぬりま
 源よりぬきけしうあしぬりま
 わりぬきけしうあしぬりま

ちまのゝふゝゝちまのふゝゝ
 つゝゝゝ はゝゝゝ
 月ひつゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 やれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 トモ未考
 共政朝長肥後ゝゝゝゝゝゝ
 天曆のゆゑのゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝゝゝ乃いゝゝゝゝゝゝゝゝ
 はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 天曆御製
 わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一 拵ふとてとて
 天曆時時席芳子小
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ

天曆時時席芳子小
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ

一 拵ふとてとて
 天曆時時席芳子小
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ

天曆時時席芳子小
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ
 一 衆尼大臣師^新氏女
 故^新妻^新はゆつてふ

あつらひしきいひや
らんを食へし
あつらひのまのり
心明しあつら
しと轡と馬と
順和名轡也
後ゆきし神と
もつたは長いの
まのりまのり
にうへつた神
は神められハ
にのへつた
後ゆきし神と
は名橋を
ついでハ
つた

あつらひしきいひや
らんを食へし
あつらひのまのり
心明しあつら
しと轡と馬と
順和名轡也
後ゆきし神と
もつたは長いの
まのりまのり
にうへつた神
は神められハ
にのへつた
後ゆきし神と
は名橋を
ついでハ
つた

あつらひしきいひや
らんを食へし
あつらひのまのり
心明しあつら
しと轡と馬と
順和名轡也
後ゆきし神と
もつたは長いの
まのりまのり
にうへつた神
は神められハ
にのへつた
後ゆきし神と
は名橋を
ついでハ
つた

あつらひしきいひや
らんを食へし
あつらひのまのり
心明しあつら
しと轡と馬と
順和名轡也
後ゆきし神と
もつたは長いの
まのりまのり
にうへつた神
は神められハ
にのへつた
後ゆきし神と
は名橋を
ついでハ
つた

高麗のやうなやうな天龍もも蘇武の相國のり居るをとて
 けりといふやうなやうなやうなけりといふやうな人丸入唐事此
 所外無所見但上古事唯可往本とあり愚案清輔盛草子云万葉集
 十五云天平八年丙子六月遣使新羅國之時使人等各悲別贈答
 及海路之上勸誘陳思作并當所誦詠并一百四十五首
 此中多有人丸并但不知其名稱謂之天漢各陳所思作并
 引ニアリテテ及イモニアリヒモノ我ニサリテ思フヤモ又
 フサレハ秋カセサミロカセガトキアフヒロモヤチコ是又如
 拾遺集人丸并也詞書モロコニ使ニサリテ時曰云云已上到筑紫
 并也又云遣唐使大伴宿祢作手房丸記云日本大使山城史生
 上道人丸副使陸奥并從五位下玉手人丸并件使等天平勝
 寶元年四月四日進發同二年九月廿四日歸着紀伊國又
 人丸集ニ有入唐之由并也若此人丸并但異姓歟作者部類云私云
 遣新羅之使無入丸案之被使等令詠吟人丸并歟

物名 歌乃物と云ふ

拾遺和歌集卷第七

僻案抄云かりと云ふ

物名

物名 歌乃物と云ふ

名梅

人丸と云ふ

物名 歌乃物と云ふ

けりといふやうなやうなけりといふやうな人丸入唐事此

物名 歌乃物と云ふ

けりといふやうなやうなけりといふやうな人丸入唐事此

物名 歌乃物と云ふ

けりといふやうなやうなけりといふやうな人丸入唐事此

物名 歌乃物と云ふ

けりといふやうなやうなけりといふやうな人丸入唐事此

物名 歌乃物と云ふ

けりといふやうなやうなけりといふやうな人丸入唐事此

物名 歌乃物と云ふ

けりといふやうなやうなけりといふやうな人丸入唐事此

今より秋の末
時節のまじり
けし人のあはれ
けし人のあはれ
人さすかきもの
離れてはたき
わやとのたの
おのたのたの
懐いもの
あはれもの
とれもの
あはれもの
僻業村
詞舟は
の習われ

けし人のあはれ
あはれ
わやとのたの
いもの
けし
とれもの
いもの
ら
秋のよた

今より秋の末
秋のよた
わやとのたの
あはれもの
あはれもの
けし人のあはれ
けし人のあはれ
人さすかきもの
離れてはたき
わやとのたの
おのたのたの
懐いもの
あはれもの
とれもの
あはれもの
僻業村
詞舟は
の習われ

わやとのたの
あはれ
わやとのたの
いもの
けし
とれもの
いもの
ら
秋のよた

うねいさうや
 いもんとつひわかれ
 きのあこひひし
 とつひひし
 ねんいさふひし
 いまねねあふひし
 ねれひまねねあ
 ねれひまねねあ
 いまねねあふひし
 とつひひし
 ねのねいねのね
 ねのねいねのね
 ねのねいねのね
 ねのねいねのね
 のねのねいねのね

ひし
 いもんとつひわかれ
 おひし
 ねんいさふひし
 山乃やふひし
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ひし
 あふひし
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ひし
 あふひし

いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね

ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね
 いもんとつひわかれ
 ねのねいねのね

くもふ
栗野山^{ツルギ}峰を定那と和名よま
ちるふらうらわするすれういづねは
わらうもこうやうさちられ
このちのよあわれ^尼うていづらるゑ
そく
本語に據り物撰よ本語の正體に
あるにあく冊をかたぬこのちのよ
いづつあわれまやういん
よといえ
在原元吉棟梁子
な今こあり
うき家人もえうに秋をまれ
これ思ふともいふあういん
^{イさまとん}

[illegible]

身をすくひなかりけり我れ
 くみれりん事なり
 いぬみなり
 犬御所陽信信

とちりらむしきくもていぬ
わひるえゆるいすもちありたり
あふねなりなる 荒船社為さし

丁かん
くはふんこけまゝにありあつたせりに
あふねのやちろくえいじん
あふねのいかり ちげゆせい

丁巳

あゝありとありにありはありありに
きこえたりとていふなり
あゝありとていふなり
かゝつるやめのおもひちんぞ
とりあゆむをいへともさ
とていふにゆゑ人々さす
あゝとてわかれ人乃すびい
けしきを見えゆるやまれあり
拾遺歌のうた
けしきみけ
スゲ
紀補時考
なまじりともあらぬいふなり

は
み
の
け
紀
痛
時
事

紀補時考

何卒の躍^{ハナ}と^{ハナ}に
 西^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 さる^{ハナ}を^{ハナ}を^{ハナ}を^{ハナ}を^{ハナ}
 お^{ハナ}に^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 秋^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 あ^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 ま^{ハナ}と^{ハナ}と^{ハナ}と^{ハナ}と^{ハナ}
 り^{ハナ}わ^{ハナ}れ^{ハナ}れ^{ハナ}れ^{ハナ}
 わ^{ハナ}る^{ハナ}あ^{ハナ}や^{ハナ}し^{ハナ}や^{ハナ}
 執^{ハナ}事^{ハナ}す^{ハナ}し^{ハナ}と^{ハナ}と^{ハナ}
 け^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 け^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 や^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}

お^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 秋^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 か^{ハナ}や^{ハナ}く^{ハナ}さ^{ハナ}き^{ハナ}
 あ^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 あ^{ハナ}や^{ハナ}ち^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 は^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 わ^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 け^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 り^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 け^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}

う^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 も^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 乃^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 あ^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 お^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 秋^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 り^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 本^{ハナ}朝^{ハナ}武^{ハナ}用^{ハナ}腹^{ハナ}赤^{ハナ}二^{ハナ}
 云^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 今^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 き^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 こ^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 奇^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 い^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 鹿^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}

は^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 ふ^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 り^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 う^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 今^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 い^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 本^{ハナ}朝^{ハナ}武^{ハナ}用^{ハナ}腹^{ハナ}赤^{ハナ}二^{ハナ}
 云^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 今^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 き^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 こ^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 奇^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 い^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}
 鹿^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}の^{ハナ}

黄菜 和名云
ヨサイ

温菰黄菜とあるは
常よりうすく食餌を
わりとく 畧記口訣
春うせれけささや
春風よたのひと
事を学ぬる乃
衣もわさうとて
同の子なれとて吹き
ぬくせ物なれ我わ
れいの同もやも也
おまふとけいもわさ
今海うハ又席れ
事とて感ふんと
なりすさうとて
心も明きなり

受付

善くせ乃けりややけれうへいとの
 花のころもやえりひりたり
 すがり ニカリ 糰餅 和名云形如藤葛者也
 一説殿上のまがりこ食也といふ
 かしきまけりまがりなる物なり
 秋なるもよくいへるやわらん
 柿 ナシ 萩 ナシ
 こち ナシ と ナシ ころ ナシ
 萩 ナシ 萩 ナシ
 すけん ナシ
 かしきまけりまがりなる物なり
 秋なるもよくいへるやわらん
 柿 ナシ 萩 ナシ
 こち ナシ と ナシ ころ ナシ
 萩 ナシ 萩 ナシ
 すけん ナシ

七

+

くちくちのり

朽葉色折後

ありきみとれに
 落口ぬきとれ
 こゝろに
 まこととや
 けのふり
 ぬきとれ
 芦の苗と
 とや

くちも男乃切也

あひまき乃山の木乃をれちそに
あ乃あきうあえれありと

あ
ま

鼎イレバチ、和ニ名ク云ク詭ニ父ク云ク三足兩耳和五味之寶聖也

は乃々おれおれわいふつゝ
あゝあゝとえこちうん
むなしくも今この車に枕を
あ

いふは、おまゝにうに、つゝ、
なむ、いんまゝ、まゝ、

子はね

いふなりや
雪のふり
さうなやい
はるる
いふなりや
雪のふり
さうなやい
はるる

是班超二毛也

此の書は、
一、
四十九日
結句

